

当院には重森三玲の最晩年の作品が3庭もある。いずれも晩年とは思えないエネルギーで抽象性の高い庭だ。各庭とも独創性に満ちた作品である。最晩年でも創作意欲が衰えていないことに敬意を禁じ得ない。

- ①蓬萊遊仙庭：四方が宿坊で囲まれた四方面ともいえる難しい庭であるが、抽象性が高いため何処から見ても斬新な造形だ。このような庭はパリやニューヨークの美術館でも違和感なく収まるであろう。
- ②愛染庭：本堂に愛染明王が祭られているが、日本庭園としては類を見ない幾何学模様で出来ている部分と、大きな築山とその周辺に、絢爛豪華な石柱群が林立している。日本庭園の新旧の意匠が混然一体となっている。
- ③登仙庭：池中には鶴島亀島があるが、池の護岸は全く新奇な作りである。池の背後の築山は皁月の大刈込で覆われている。その皁月の中をZ字型の曲水が流れ、蓬萊連山が石組みされている。つまり鶴亀蓬萊の庭だ。



蓬萊遊仙庭：左右からの出島に苔を添え、15石が奥行きのあるように組まれた造形だ。



愛染庭：通路を挟んで新旧の意匠が同居している。葛石を幾何模様に組み、白と錆色の砂で彩られている。塀際の築山には大刈込のサツキが植えられ、参道と築山の立石は豪華極まりなし。新旧意匠の競演だ。



登仙庭：宿坊なのでこの庭は池泉庭園であるが、従来の護岸から一線を画した独創的な護岸の池だ。池には抽象的な鶴島亀島があり、鶴亀蓬萊の庭だ。



軒下の洲浜模様と池泉の護岸には色彩のある石と目地は重森好みのオレンジだ



龍門瀑（登仙庭）



宿坊から見た登仙庭



金堂から見た愛染庭石組み



愛染庭石組み